

# 野澤 拓哉

## 使命感と誇りを持って



一流アスリートと「超」二流アスリートには、ひとつの現象をどう捉え、どう感じるか、そこに大きな違いがある。今紹介する野澤拓哉くんは、まさに「超」一流の本物のアスリートのひとり。

現在、株式会社ティーシー情報ネットワークとアスリート雇用契約を結び、富山県車椅子バスケットボールクラブ（富山県WBC）のプレーヤーとして活躍するプロ選手である。リオデジャネイロパラリンピック（ブラジル）に向けて、今を生きている。

夢は、パラリンピックで日本代表キャプテン、金メダル獲得。今所属している富山県WBCのクラブ世界一。

彼と話をしていると、夢が実現するビジョンが見える。それを可能にできる魅力が野澤拓哉くんにはある。

保育所の年長組だった6歳の夏休みに、その日はやつぎた。友達と悪ふざけをして遊んでいて突然の事故。激痛と足が麻痺していく恐怖の中、病院の先生や親にも、

何でこうなったのかを話すことはしなかった。

「誰かの責任になることが嫌だったし、友達が大切だった。」結局、原因不明というカタチになる。

小学校4年生のころ、「僕はこのまま一生車椅子のままなんだ。」と気付く。それまで、いつか歩けるようになると思っていた拓哉くんは、友達にも「歩けるようになるよ。」と話していた。

しかし、歩けるようにはならないと気付いたとき、「友達にウソをついてしまった。謝らなければいけない。」と思ひ、友達にこのままずっと歩くことができないことを話して回る。覚悟し決断した日を今でも覚えている。

「車椅子でも毎日が楽しいから、このままでもいいかなと思えた。悲しい気持ちや不安な気持ちはありませんでした。」

「きつとそれは、毎日楽しいと思わせてくれる友達がいつも一緒だったからだと思えます。」



そして、小学校6年生のときに車椅子バスケットを始めることとなる。

拓哉くんの自分を肯定し、仲間を大切にすることを愛する。育んだのは、きつと家族の愛だろう。小学校の授業参観で、自分が産まれた時を知る授業があった。そのときに、感謝の気持ちを伝えるチャンスだと思ひ、「お母さん、僕を産んでくれてありがとう。」と発表した。

今回の取材は、野澤くんの仲間を想う熱い気持ちが詰まった今までのない異例尽くしとなった。

「ぼくの記事はすでに準備してあります。それよりも今日一緒に話し合いたいことがありまわ。」

「チームを強くするためにはどうすべきか、ぜひ一緒に考えてください。」

そう言いつつ、自分の記事と車椅子バスケットのDVDを手渡された。そして、チームメイトもひとり参加し、取材ではなく、ミーティングの時間となった。

その後、送られてきた拓哉くんからのメッセージは、素直で純粋な気持ちを感じることができた。

「使命感と誇りを持って、何事にもチャレンジしていきたい。失敗を恐れず、諦めずに成長し合える素晴らしい関係を目指して頑張ります。」

### ■野澤 拓哉

1985年6月11日生まれ。石動高校男子バスケット部入部。アメリカインソイ大学で開催されたエリートキャンピングに参加。千葉県の淑徳大学社会福祉科に進学し一人暮らしに挑戦。千葉ホークスのメンバーとして日本選手権3連覇。岡山国体優勝。2005年ジュニア世界選手権2位。2006年ワールドカップ7位に貢献する。今年から、富山県WBCキャプテン。